

哺乳類

ヒグマ

ヒグマは、日本最大の陸生哺乳動物で、最大で体重は、300 キロ（雌）、500 キロ（雄）、体長は約 2.5 メートル（雌）、3 メートル（雄）にまで成長します。北半球に生息し、北海道は最南端の生息地です。何でも食べる雑食動物のため、阿寒の厳しい季節の変化に食事を適応できています。アイヌ語では、ヒグマは「山の神」を意味するキムンカムイと呼ばれています。アイヌ民族によると、ヒグマは、人々に恵みをもたらすために送られた、神の化身です。かつては、ヒグマの肉は食糧に、皮は暖かい衣類になり、一部は薬にも使われました。

エゾシカ

阿寒地域のエゾシカは、北方の屈斜路湖や網走地方に季節的に移動するものが多く、地熱があるせいか、阿寒の森はエゾシカの重要な越冬地になることもわかっています。明治時代(1868-1912)、開拓のため本州から移住した和人が、肉や毛皮を加工し、海外へ輸出する目的で、何万頭ものエゾシカを乱獲しました。この乱獲に加えて、1879 年の冬の大雪で餌不足などにより、絶滅寸前まで数が激減したため、エゾシカ保護の目的で 1890 年から禁猟されました。その後、1957 年以降に狩猟が解禁されたにもかかわらず、1980 年頃から急激に増加し、分布も拡大しています。もはや絶滅の危機にはありません。これには、狩猟者が減少したこと、山林を適切に管理する人々が少なくなったことなどたくさん要因があります。現在、阿寒湖温泉街や周辺国道でもエゾシカが頻繁に見られ、森林植生の食い荒らし、交通事故の増加などの被害も出ています。

エゾモモンガ

エゾモモンガは、小さな体と大きな丸い目を持っているため、北海道で最もかわいらしい動物の 1 つとして知られています。その際立った特徴は、前脚と後ろ脚の間で広がる飛膜で、20～30 メートルも「飛ぶ」ことができます。エゾモモンガは夜行性の動物で、日中は、キツツキがあけた穴をねぐらに利用することもあります。主に木の葉、芽、種、木の皮を食べ、自分が住んでいる木の周辺の木から食べ物を得ています。

モモンガは地面に降りて移動することができません。森の伐採（住宅地の拡大など）により、森林の孤立・分断化が進むと移動経路を絶たれたことになります。例えば、島を結ぶ橋がなくなった状態です。そうすると、繁殖や分散が正常に行えなくなり、数が

減少していくと考えられます。阿寒摩周国立公園ではこうしたことを避けるために開発を規制しています。